# 亀茲国アアイ（阿艾）石窟の壁画についての一考察

山田勝久

## 一　はじめに

一九九九年五月、薬草の採取のために、天山山脈の奥地に入った二十四歳の二人のウィグル族の牧人、アブレティとトルビーは、偶然にも峡谷の断崖の中腹に一つの石窟を発見した。窟内は精巧な壁画で彩られており、驚いた二人はすぐに役所に報告した。次いでその年十月十九日、新疆ウィグル自治区文物管理局、新疆亀茲石窟研究所を中心とする初期段階の調査団が結成され、学術研究の第一歩が実施された。その結果、新疆にある数多くの石窟の中でも、きわめて保存状態がよく、仏教美術史の上からも芸術水準は高く、敦煌の莫高窟に比べても何の遜色もない壁画であることが判明した。アアイ石窟と名づけられた石窟は、唐文化の鮮やかな色彩に満ちており、長安や洛陽の盛唐文化が遠く天山南麓に伝わったことを示していた。

洞窟はクチャ県城北方約六〇キロ、ウィグル語でキジルャー、「紅い山」と呼んでいるクズリア大峡谷の中に造営されていた。ここは幾万年に及ぶ風雨剥飾、山洪冲刷を経てできた峡谷で、窟はクムログエ渓谷の奥深い岸壁の西側に開鑿されていた。あたかも桂林の山肌を鋭くしたような風光で、山と山の幅の広いところは五三メートル、狭いところは四、五〇センチしかなく、やっと一人通れるかどうかの幅である。

# 亀茲国アアイ（阿艾）石窟の壁画についての一考察

山田勝久

## 一　はじめに

一九九九年五月、薬草の採取のために、天山山脈の奥地に入った二十四歳の二人のウィグル族の牧人、アブレティとトルビーは、偶然にも峡谷の断崖の中腹に一つの石窟を発見した。窟内は精巧な壁画で彩られており、驚いた二人はすぐに役所に報告した。次いでその年十月十九日、新疆ウィグル自治区文物管理局、新疆亀茲石窟研究所を中心とする初期段階の調査団が結成され、学術研究の第一歩が実施された。その結果、新疆にある数多くの石窟の中でも、きわめて保存状態がよく、仏教美術史の上からも芸術水準は高く、敦煌の莫高窟に比べても何の遜色もない壁画であることが判明した。アアイ石窟と名づけられた石窟は、唐文化の鮮やかな色彩に満ちており、長安や洛陽の盛唐文化が遠く天山南麓に伝わったことを示していた。

洞窟はクチャ県城北方約六〇キロ、ウィグル語でキジルャー、「紅い山」と呼んでいるクズリア大峡谷の中に造営されていた。ここは幾万年に及ぶ風雨剥飾、山洪冲刷を経てできた峡谷で、窟はクムログエ渓谷の奥深い岸壁の西側に開鑿されていた。あたかも桂林の山肌を鋭くしたような風光で、山と山の幅の広いところは五三メートル、狭いところは四、五〇センチしかなく、やっと一人通れるかどうかの幅である。

その正確な場所は北緯四二度七分、東経八三度五分、海抜は約一、五六〇メートルである。そこは新疆ウィグル自治区クチャ県のアグ郷イディク村、人口三千人余の羊や馬や牛を主たる牧畜とし、若干の農耕を営む地であった。長い歳月に亘って、夏期の天山の雪どけ水や土石流が洪水の如く渓谷を走り、村の中にこのような奇観を誕生させたといえる。石窟は谷底から三〇メートル余りの高さにあるが、それでも天山の雪どけの大洪水の折、窟の周辺まで泥流が押し寄せたことが、石肌の痕跡より証明される。

この渓谷の水は、窟から二キロほど離れたクチャ川の上流の銅歴川、すなわち『水経』でいうところの「東川水」に流れ注いでいる。その銅歴川の西岸の台地には、唐代に造営されたアアイ古城がある。位置は北緯四二度八分、東経八三度六分、高度約一、六五〇メートルである。古城は東西一二四メートル、南北二四メートル、壁の幅は約八メートル、その高さは六から八メートル、城壁の東西南北には楼閣の遺址もある。城内からは泥塑の残片や石雕の仏像、また水瓶や椀や皿などが発見されている。西突厥等の侵入を防ぐための一大軍事拠点だっただけに、弓剪も大量に散乱しており、城壁は人知ることなき天山の奥地であったが故に、往時の繁栄を今によくとどめている。

## 二　石窟の規模について

クチャに分布する仏教石窟は、キジルにせよクムトラにせよ比較的村里に近い、河川のある風光明媚な地域に造営されている。それは修行者が日々の食料を入手しやすい場所であり、村人が参詣しやすい距離が石窟造営の基本的条件であるからだ。それに対してアアイ石窟はあまりにも村落から遠く離れ、かつ深山幽谷にある。その理由はただ一つ、天山を越えて亀茲に侵入しようとする西突厥を、入り口で撃破しようとして辺境防衛にあたる、アアイ古城の士卒や工匠たちの礼拝窟であったことによる。

アアイ石窟は唐代中期に開鑿されたほぼ方形の石窟で、正面と左右に美しい壁画が描かれ、それぞれが関連した世





界を表現し、一幅の中堂形式の画巻の様相を呈している。中央に壇が設けられ一体の仏像が安置され、壁画は非常に丹念に描かれ、描写方法も色彩も精緻を極めている。その内容は仏、菩薩、千仏、経変などで、絵画の特色と傾向性から唐の中原文化がクチャに伝わったことを明らかに示している。また、このことはインドに発生した仏教が西域に伝わり、さらに黄河中流で花開いたあと、再び軍人や職人や僧侶たちによって西還し、クチャの伝統文化と融合し調和して、独自の仏教美術を具現したことを表している。

そのアアイ石窟は、紅色砂岩に開鑿されており、入り口の横幅は約三・五メートル、奥行きは四・六メートル、高さは三・五メートル、面積は約一六平方メートルである。石窟の方向は、南から三七度東へ向いている。天井はアーチ型で、天井（券頂）真中から端までの落差は八〇センチである。正面の壁の高さは約二・五メートル、両側の壁の高さは一・七メートルである。仏像は今は失われ、方形の台座のみが残存しており、その幅は約二メートル、長さは約二・五メートル、高さは約四五センチである。

石室は、断崖の中腹に鋭利な道具で穴を開け、最初に荒土を塗り、その上に葦草・羊毛・麻絮などを細かく切りきざんでよく混ぜ、その草泥皮の上に白土が塗ってある。完成した白土の上に画稿の下地を作ったのち着色しており、これは中国の伝統的な石画制作の技法である。しかし、天山の峡谷を吹き流れる強風のため、石窟の壁画の下部の多くは破壊されている。また、壁画の金箔は盗人に削り取られており、発見された時には、窟内にはタバコの吸殻や雑品が無造作に捨てられていたという。

## 三　窟内の成立年代について

アアイ石窟の成立年代の詳細は不明だが、二十三カ所に及ぶ漢文の題記が、盛唐時期の書法、風格と一致していること、さらに正壁の結跏趺坐した仏と、莫高窟二一七窟北壁の唐代に描かれた仏との類似が指摘されよう。その他、

資料①　左壁の漢文題記

壁画中の人物像の多くは、唐代の中原の画法の特徴をよくとらえ、豊満で穏やかな顔立ちは、中国人物画法の成熟時期と重なっている。このような考察から、アアイ石窟は、唐代中期に成立したと推断される。

なおこの点について、アアイ石窟の漢文題記の一つ「文殊師利菩薩似光蘭為合家大小敬造」の書体を見てみよう（資料①）。これは、唐代の著名な書家である歐陽詢や柳公権の書体をふまえたものである。とくに石窟の壁画の題字の記入には、相当の高水準の筆致が要求されるところから、アアイ古城、または亀茲の都に駐留する唐人のうち、書に巧みな人物が書写したと思われる。この漢文題記の榜題には、裴、白、寇、李、梁、趙、申、傅、彭の九姓の標記がある。この中の「白」は呂光将軍に敗れた国王の白純王に示される如く、古代亀茲国の王姓であり、「裴」は疏勒の大部族の姓である。これら亀茲の都城に住む貴顕やアアイ古城の住民等は、経済的規模に比例して石窟造営にかかわったと推察される。漢人と少数民族とが共同して供養したと思われる題記もあり、このことはクチャでは多民族が共生し、相当に通婚も進んでいたことを証明している。





## 四　壁画の内容について

仏教東漸の途中、シルクロードでは仏教美術の花が絢爛豪華に咲き薫った。とくに、天山南路の要衝で人口十二万余の亀茲国では、一時期安西都護府が置かれ、大量の漢人兵士が駐留したこともあって、西域風だけでなく中原的な多くの石窟芸術が誕生した。文字が読めない砂漠の民のため、経典の説話や宇宙観、また生への歓喜を分かりやすく絵解きしたのである。すなわちこの視覚に訴える手法は、「経変」として西域のオアシスの各地で普及し、画工たちの執念の美意識の結晶としてその光芒を今に伝えている。

ところで亀茲国は西域の中で、最も熱心に仏教が信奉されたところである。キジル、クムトラ、クズルガハ、シムシムなどの仏教拠点には、仏塔や大伽藍が造営され、赤みがかった灰色（藕色）と群青色を主にする色彩を見て、玄奘はその著『大唐西域記』で「仏教の荘厳は人工を越ゆ・・・伽藍百余、僧徒五千」と、驚嘆の思いを綴っている。

次にアアイ石窟の内部を紹介すれば、まず正壁はアアイ石窟壁画一六平方メートル中の主要な部分を占めている。中央に結跏趺坐した無量寿仏を蓮華台座上に描き、左に法華経観世音菩薩普門品第二十五の「怖畏急難の中」にいる一切衆生を救済することを説いた観世音菩薩を配している。右には、八万人の菩薩の一人として霊山会に列し、阿耨多羅三藐三菩提を得て自在に法を説くことができるという大勢至菩薩を脇侍として配している。左下には阿闍世王の母、韋提希夫人を表情豊かに宝閣の前に描き、盛装した夫人は二人の従者を連れ清浄な世界を楽しんでいる。

全体として、一人ひとりの菩薩の表情も西域住民に似て、鼻が高く個性的で躍動感にあふれている（資料②）。仏の周辺には二十一体の飛天を配置し、池塘、琵琶、箏、鼓、鶴、蓮華、式亭、廊、楼閣を描き、建築物の壁や扉にも飾り図としての植物が美しく点描されている。右下では閣台亭の太鼓を打つ音を聞き、左下の欄干では白鶴がその妙音を聴き入っているようすを静と動でみごとに描いている。また、みどり豊かな花弁を八葉配しており、芯の中の種子

資料②　正壁右側の壁画

を示す三点の白色などは実に美しく精緻である。光背も大きくくまどり、中を緑色や群青色で染めている。この画法はキジル千仏洞第八〇窟の伎楽菩薩や、第一四窟の仏説法図の光背と類似している。

次に左側の壁画を見るに、五体の仏菩薩が立像として描かれているが、長い歳月の自然破壊によって下部の剥落がはげしい。入り口から奥に順番に見てみると、薬師経で説かれる薬師瑠璃光如来が左手にペルシャ伝来の透明なガラス鉢を持ち、右手で比丘十八物の一つである錫杖を執って描かれている（資料③）。東方浄琉璃世界の教主で、一切衆生の病根を治そうとして十二の大願を発した仏である。中国では天台智顗が薬王の再誕、本地薬王菩薩とされていることもあって、南朝の時代に中原に伝えられ、民間の仏教信仰に大きな影響を与えている。

この像の右の袈裟の地色は茶褐色であるが、左の衣は濃淡の緑色であり、その画風は清晰、風格は独特である。条は紫褐色地で、その条の文様に特色がある。敦煌莫高窟に同様の菩薩が何点か見られる。たとえば、右手に柳枝を持ち左手に水瓶を持っている第二七六窟の迦葉の袈裟の文様と似ている。第一〇七窟の三人の仏弟子の袈裟などは、条だけでなく色彩もよく似て

資料③　左壁の薬師瑠璃光如来

資料④　右はアアイ石窟、左は莫高窟276窟の条

おり（資料④）、五番目にも薬師瑠璃光如来が描かれている。

三番目は、釈迦の九代前の本師とされる文殊師利菩薩である。文殊については法華経、華厳経、諸仏要集経、阿闍世王経、心地観経、首楞厳三昧経、大宝積経などに登場する。それによれば、文殊はインドの舎衛国にバラモンの子として生まれ、後に出家して普賢と共に智慧第一の菩薩として、多くの衆生を教化したと説かれている。中国では東晋後期に文殊信仰が盛んとなり、五台山は文殊の聖地とされた。

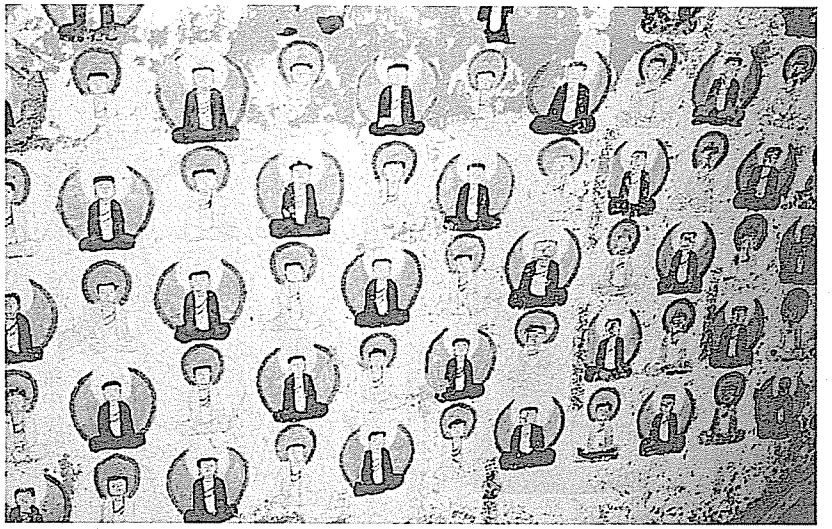
アアイ石窟の文殊菩薩は宝冠をつけ、首に二連の宝珠をかけ、両手に釧をかけ、右手に蓮華を持っている。とくに注目されるのは宝冠の華麗さである。敦煌の莫高窟などにも、絢爛豪華な冠をつけた菩薩の壁画が多く見られるが、アアイ石窟の壁画は決してそれに見劣りするものではない。なお、トルファンの吐峪沟石窟寺から出土した唐代の絹画の菩薩の宝冠と、アアイ石窟の日月をかたどった宝冠とに共通点が多く見られる（資料⑤）。

次に並んでいるのは華厳経、梵網経、観普賢菩薩行法経等で説かれる盧舎那仏、すなわち新訳の毘盧舎那仏である（資料⑥）。梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品十巻上に「我已に百阿僧祇劫に心地を修行し、之を以て因と為し、初めて凡夫を捨てて等正覚を成じ、号して盧舎那と為す。蓮花台蔵世界海に住す」とある。この盧舎那仏の信仰は、五胡十六国の後期に華北に流行し、唐の則天武后の時代に大いに尊重された。

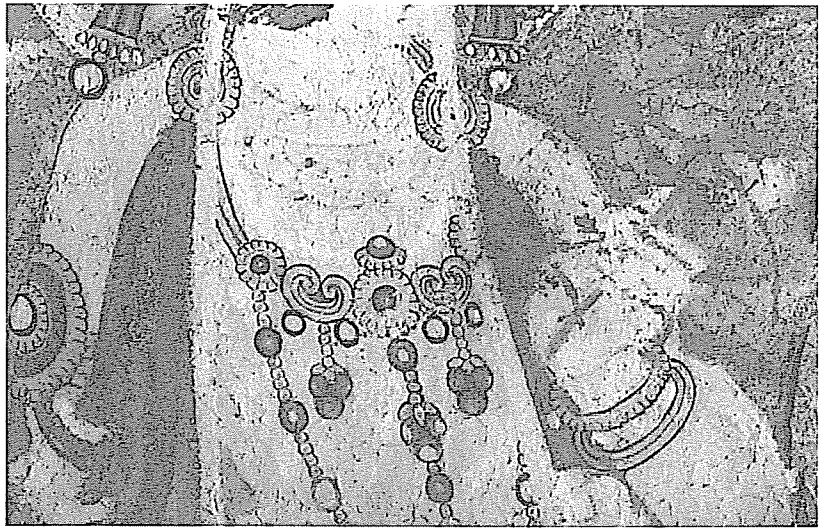
アアイ石窟の盧舎那仏には、仏教で説く法界諸相が表現されている。左肩に仏典で説く「此の妙響の音を聞き、尽く当に此に雲集すべし」としての梵鐘、右肩に鼓、その下に一仏四菩薩を描いている。さらにその下に須弥山を描き、山の下に四蛇を、その下に走馬を描き、左に月、右に太陽を描いている。また、首の三道をはっきりと描き、左の腕に手先の方から白象、阿修羅、天人を描き、左手は施無畏、右足に甲冑をつけた武士、左足に男女一人ずつ供養人を描いている。腰には銙帯を巻き、前中央に一条の腰佩が垂れ下がっている。髪は螺髪で頂に肉髻がある。真青眼の瞳は紺青で青蓮華のつぼみのようである。全世界の衆生の声を聞くが如き大きく長い耳朶には、耳朶環はついていない

資料⑤　左はアアイ石窟、右は吐峪沟石窟の宝冠

資料⑥　アアイ石窟の盧舎那仏



資料⑦　左壁の千仏



資料⑧　右壁の楊枝観音





ものの、表情は威厳に満ち静穏である。

このように、衣に宇宙表現の図像を描くという発想は、敦煌四二八窟の盧舎那仏と相通ずるところがあり、とくに、アアイ石窟も莫高窟も、共に盧舎那仏として地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道を衣に描いていることは注目される。なお、アアイ石窟の左壁に描写されている千仏は、すべて美しい袈裟をつけて蓮華座上に描かれ、その袈裟の色は茶を主とするものと、白に近い薄墨色を主とするものを交互に配置している（資料⑦）。今日、千仏は仏菩薩の頭上に九列一三四体残っており、盧舎那仏の右手の部分に十体、薬師琉璃光仏の右手のところに八体ある。

次に右壁であるが、内からみれば菩薩、観世音菩薩、半伽座仏の三体である。まず、観世音菩薩は、法華経観世音菩薩普門品第二十五に「若し是の観世音菩薩の名を持つこと有らん者は、設い大火に入るとも、火も焼くこと能わじ、是の菩薩の威神力に由るが故に。若し大水に漂わされんに、其の名号を称せば、即ち浅き処を得ん」とある。すなわち一切衆生を救済することを説いた経として、中国では西晋に伝来し、南北朝から唐朝に至り盛行、莫高窟や龍門石窟など中国各地に現われる。

アアイ石窟の観音は楊枝観音で、左手に柳の枝を持ち、右手に蓮の花か浄瓶を持っている。頭に宝冠をいただき、左右の手腕に二連の環釧をつけ、きらびやかな首飾りをつけている。曲線美を以って描いた腰のくねりは、艶麗さをもかもし出し、辺境守備の兵士に、幻想的で甘美なノスタルジアを連想させたことだろう（資料⑧）。一番手前の座仏は半伽であり、三重の光背がひときわ色鮮やかに表現され、額のすぐ上の頭髪は平行である。これは右足の平行さとあいまって、画中に安定観を与えている。残念なことは、三体とも顔が全く見えないほど鋭利な刃物で傷つけられていることである。いつの時代、誰が破壊したかは定かではないが、発見された時、窟内に電池やタバコなどが散乱していたことを思うと、トルファンのベゼクリク千仏洞の破壊と同じ運命をたどってきたと思われる。

## 五　漢文題記について

石窟の左右両壁の仏菩薩像の説明として、前述の如く漢文榜題が二十三ヶ所あり、クチャの数多くの石窟の中にあってその多さは群を抜いている。これもまた唐代において中原に花開いた大乗仏教の文化が、クチャに流入した証左である。まず左壁であるが、外から中にかけて順番に見ていけば次の如くとなる。

「清信仏弟子行官楊〇〇五月十五日〇拝記」の十八字。
「文殊師利菩薩似光蘭為合家大小敬造」の十六字。
「清信仏弟子寇庭俊敬造盧舎那仏」の十四字。
「清信仏弟子寇庭俊敬造薬師琉璃光仏」の十六字。

漢文題記には供養者の氏名と、信奉する対象としての仏が明記してある。地元の熱心な仏教徒で経済力のある者は、自らの来世の幸福と現世に於ける功徳無量を求め、その経済力に応じて石窟を造営し、壁画を描き仏像を安置した。なお二十三ヶ所以外にも、漢文の供養題記の跡を随所に見ることができるが、残念ながら皆破壊されて解読不可能である。以下、読めるもののみ記せば、次の如くである。

「清信〇〇〇〇〇」、「裴心喉〇〇」、「傅〇〇〇〇仏供養」、「彭〇敬造七仏供養」、「梁信敬造十方一心供養」、「寇俊男善愛造七仏供養」、「女弟敬造七仏一心供養」、「趙王〇〇造上七仏供養」、「寇俊男善愛七仏供養」、「妻白二娘造七仏一心供養」、「〇〇〇造千仏一心供養」、「申令光敬造十方仏供養」、「李光暉造十方一心供養」





この中に七回出てくる「七仏」とは、阿含経に説かれる過去世の七仏のことである。すなわち、毘波尸仏、尸棄仏、毘舎浮仏、拘留孫仏、倶舎含牟尼仏、迦葉仏、釈迦牟尼仏をいう。また、三回出てくる「十方仏」については、「十方の諸仏」の意なら、法華経、華厳経、観虚空蔵菩薩経などに説かれている、十方の仏土に住する諸仏のことである。また「十方の仏」なら、全宇宙のあらゆる仏をさす。ここでは「七仏」に対応する仏と見て、十住毘婆沙論等で説かれる東方善徳仏から下方明徳仏までの十種の仏をさすと思われる。

こうした七仏とか十方仏といった多様な宗教観は、とりもなおさず仏教の寛容性を示すものといえる。敦煌などでは、仏教の興隆時期と並行して、公然と一部の住民にゾロアスター教やマニ教も信仰されていたことが、唐末の文学作品「敦煌二十詠」の中に詠まれている。とくに四世紀から八世紀、西域で仏教が盛行した時、支配者はもちろん住民の八割までが仏の教えを信奉したが、それでも仏教を信仰するかしないかは、地域住民の一人ひとりの自主的判断にまかされていた。すなわち、六朝から唐代にかけてのシルクロードには、宗教の自由があったという事実を、史書は証明している。

ところで、アアイ石窟には窟の西側、すなわち左壁の盧舎那仏の右下に、解読できない神秘的な文字が十行ある。白泥灰の上に鋭利な器物によって直接に刻んだもので、新疆の研究者たちは、乙種トカラ文ではないかと述べている。『大唐西域記』では、クチャの人々は「文字はインドを手本にし、少し改変している」と述べているが、この文字が記述されていることによって、漢文の題記の中に少数民族の供養人が記され、さらに現地人の言語も刻字されていることになる。

アアイ石窟は七五一年のタラスの敗戦以後、八世紀末には廃棄されたと推察される。クチャは九世紀後半ウィグル族の勢力下に入り、次いでカラハン王朝の支配下に入った。十一世紀の中頃からトルコ化・イスラム化が進み、十三世紀から十七世紀まで、チャガタイ＝カン国に属した。一六八〇年頃、ジュンガル王国の征服するところとなり、一

七五九年、清国のタリム盆地支配の結果その領土となった。中華民国からはクチャ県となり、現在の中華人民共和国に引き継がれている。

二〇〇三年九月二十四日夕刻、私は北京において艾則孜クチャ県長とアアイ石窟のすばらしさについて深夜まで対談した。県長は、私が日本各地のNHK文化センター等をはじめとするセミナーにおいて、またマスコミ各紙を通してアアイ石窟の価値について幅広く訴えていることを知ると大変に喜ばれていた。その対談を受け、私は我が国で初めてアアイ石窟の紹介を日本経済新聞の二〇〇三年十一月二十六日朝刊に、「中国辺境、絢爛たる壁画」と題して「文化」欄に紹介した。文末に「『漢書』によると亀茲の人口は十二万に及び、天山南路最大の規模を誇った。が、後に人口の五%近い五千人余の僧侶を抱えるようになり、経済が圧迫された。しかも僧の腐敗、堕落は著しく、それを示す考古学的発見も近年あった。石窟放棄はそうしたことと無関係ではなかったらしい。アアイ石窟は中国西域に、異文化を認める文化があったことを現代人に教えてくれる。文化を守るには不断の努力が必要であることも」と明記した。

最後に、本稿の執筆にあたり、前クチャ県長の巴拉提・艾山氏の子息で、鳩摩羅什を研究している艾賽提先生より、数多くのアアイ石窟の写真資料の提供を受けたことを明記したい。あわせて、二〇〇一年九月に新疆美術撮影出版社から発行された、盛春寿主編、郭夢源・傅明方撰文『二〇世紀末的新発現、阿艾石窟』を参照させて頂いたことに、深い感謝の意を表するものである。

（やまだ　かつひさ・委嘱研究員、大阪教育大学教授）